

# 特集 子どももの文学この二年

## ★ 総論

### 語るの誰か

東野 司

二〇一九年は、久しぶりに人為的に元号が変わった年であった。

新元号への移行で、人々はすべてがリセットされて、新時代が始まるのだと祝祭に参加した。このとき、官房長官の発表を大爆笑しながら見ている女子高生たちの姿が「YouTube」にアップされたが、それはとても微笑ましい「新時代」の迎え方に見えた。

しかし、児童書の子どもたちは、いつもどおり。

内面を見つめ、分析し、論理立てて、自分語りをする。他人の距離に敏感で、その分析にも忙しい。物事を否定するときは、首や手をぶんぶん、ブンブン振り回す。幼なじみは基本的に異性で、自分を助けてくれる無双の存在だ。友人には必ずポニーテールの子がいるし、たれ目の子はおっとりしている。食べ物やファッションに詳しく、大人たちは親も含めて優しく、まず子ども側にとってくれる。叔父、叔母、部活のコーチなど、斜めの関係の大人たちも理解を示してくれる。教室の片隅に、いつも一人で本を読んでいる子がいて、その子に「何の本を読んでの？」と問うと「なぜあなたにそんなこと言わなければならぬの」といわれたりする。図書館は癒しの隠れ家にもなり、もちろん本は子どもたちを助けてくれる大切なアイテムである、などなど。

元号が変わろうが変わるまいが、書物の子どもたちは総じてこんな佇まいで物語を泳いでいる。一九年だけではない。多分これまででも、である。もちろん、それは書き手の表現と読み手の想像との共同幻想に生きる非実在の子ども